

ひょうごの福祉

2022

1-2

No.839

つながりで笑顔輝く 共生のまちづくり

特集

コロナ禍での地域防災、
災害ボランティアの取り組み

CONTENTS



- 年頭所感
- 笑顔輝く 共生のまちづくり
- あなたのまちの社協活動
- セルフヘルプグループのリアル
- ひょうごの福祉NOW



ふくみ
福美ちゃん



ひょうた
兵太くん

イメージキャラクター 作 尼子健兵衛



手軽に読める
「ひょうごの福祉」WEBサイト



この機関紙は赤い羽根共同募金
配分金により発行しています。



年頭所感

笑顔輝く
共生のまちづくりを目指して

兵庫県社会福祉協議会 会長

吉本知之



新年あけましておめでとございます。
県民の皆様におかれましては、日頃より地域福祉の推進にご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年も新型コロナウイルス感染症の影響は続き、社会的孤立や生活困窮などの地域生活課題が深刻化しました。その一方で、感染予防を徹底し、創意工夫を重ねながら、住民同士の見守りや支え合い活動を再開・継続する動きも見られ、コロナ禍という環境でもコミュニティの力を実感する一年でもありました。

現在、国では地域共生社会の実現に向けた施策を本格化させています。県内でも、児童・障害・高齢などの分野を超えた支援体制の整備と多様な居場所づくりを目指す「重層的支援体制整備事業」への取り組みや、福祉分野のみならず、医療、労働、農業、交通などの

生活関連分野との連携を図る動きなど、地域福祉を「まちづくり」の視点で進める重要性がこれまで以上に高まっています。

県社協の中期計画「2025年計画」では、基本目標「つながりで笑顔輝く 共生のまちづくり」を見据え、全ての人が尊厳を守られ多様性を認め合える社会、誰もが参加・参画して自己実現ができる社会を「オールひょうご」で目指すことを提起しております。

県社協としましても、創立から70年間積み上げてきた歴史を踏まえつつ「2025年計画」に掲げた取り組みを、役職員一丸で進めていく所存です。皆様のさらなるご支援とご協力をお願い申し上げます、新年のごあいさつとさせていただきます。

役員一同

兵庫県社会福祉協議会

会長

吉本知之

副会長

阿部昌弘

(南あわじ市社会福祉協議会会長)

谷村誠
(兵庫県社会福祉法人経営者協議会会長)

亀田龍昇
(兵庫県民生委員児童委員連合会会長)

玉田敏郎
(神戸市社会福祉協議会理事長)

副会長兼常務理事

福田好宏

理事

松原一郎

(尼崎市社会福祉協議会理事長)

藤本博敏
(稲美町社会福祉協議会会長)

秋武賢是
(六栗市社会福祉協議会会長)

中川茂
(豊岡市社会福祉協議会理事長)

田口勝彦
(丹波市社会福祉協議会会長)

躍動する兵庫、 コロナを乗り越え未来へ

兵庫県知事

齋藤元彦



新年あけましておめでとうございます。
昨年も新型コロナウイルスが私たちの暮らしに大きな影響を及ぼしましたが、県民・事業者・医療関係者の皆さんのご協力により、第五波を乗り越えることができました。

しかし、感染再拡大のリスクは続きます。マスク着用、手洗い、「密」の回避など基本的な感染対策の徹底を引き続きお願いします。県としても、保健所や医療提供体制の強化、三回目のワクチン接種の推進など、対策に万全を期します。

同時に、「ワクチン・検査パッケージ」等も活用しながら、飲食、旅行、イベントなど、社会経済活動との両立も図っていきます。

さらに、今年はポストコロナ時代を見据えた取組を本格的に検討・推進する年とします。

その一つは、時代の潮流であるデジタル化やグリーン化の加速。デジタル技術を、働き方、教育、医療・介護、地場産業や農業など様々な分野で取り入れるとともに、再生可能エネルギーの導入拡大や水素の活用などの地球温暖化対策に力を入れます。

また、少子高齢・人口減少社会への対応や、

頻発化・激甚化する自然災害への備え、交流と日常生活を支える道路ネットワークの整備など、すべての県民の皆様が安心して、育ち、働き、暮らし続けられる、だれも取り残さない兵庫づくりを進めます。

大きなポテンシャルを持つベイエリアの活性化にも本腰を入れます。二〇二五年大阪・関西万博は、兵庫に人・モノ・投資を呼び込む大きなチャンスです。更なる発展の起爆剤とすべく、ベイエリアプロジェクトの起動、万博の来場者を県内各地へ誘うフィールドパビリオンの具体化など、新たなチャレンジをしていきます。

もとより、こうした取組は行政だけでできるものではありません。民間との連携をこれまで以上に広げていきます。また、私自身が県内各地で地域の皆さんと対話を重ね、地域の課題やニーズを新たな施策に繋げていく県民ポトムアップ型県政を推進します。

「躍動する兵庫」の実現に向け、飛躍の一年としていく決意です。

皆さんのご理解、ご支援をお願いします。

松尾 幸恵

(兵庫県民生委員児童委員連合会副会長)

橋本 好昭

(神戸市民生委員児童委員協議会理事長)

伊達 恵一

(兵庫県保育協会会長)

伊富貴 幸廣

(兵庫県老人福祉事業協会会長)

黒川 恭眞

(神戸市社会福祉協議会施設部会会長)

西田 勉

(神戸YMCA常勤理事)

和田 修

(兵庫県身体障害者福祉協会理事長)

中川 寿子

(生活協同組合コープこうべ常務理事)

片山 安孝

(兵庫県副知事)

小西 康生

(神戸大学名誉教授)

松端 克文

(武庫川女子大学教授)

三宅 由佳

(税理士)

監事

村山 興治

(猪名川町社会福祉協議会会長)

古川 勝

(兵庫県知的障害者施設協会副会長)

松山 康二

(公認会計士)

コロナ禍での 地域防災、 災害ボランティアの 取り組み

私たちの生活を一変させた新型コロナウイルスは、自治会などの地域活動や平時の防災活動を停滞させました。また、災害ボランティアセンターでは、感染拡大を防ぐ観点から、ボランティアの募集を一定の地域に限定したり、事前登録を求めるなど、コロナ禍以前とは違う対応をせざるを得ませんでした。

今回の特集では、コロナ禍でのNPOや社協の取り組みを紹介し、ウィズコロナを意識した地域防災と災害ボランティアについて考えます。



写真上から

災害ボランティア連携訓練の様子（ひょうごボランティアプラザ）
行政、地域ボランティアなどの企画会議の様子（あしやNPOセンター）
武雄市災害ボランティアセンターでのボランティア受付の様子（佐賀県武雄市）
静岡県熱海市での土砂災害支援として支援品を贈呈する様子（ひょうごボランティアプラザ）

コロナ禍での地域防災活動と 災害ボランティア

令和2年の春以降、新型コロナウイルスの影響で、対面での避難訓練や防災セミナーなどの活動が減少し、地域の防災力の維持が課題となっています。また、被災者のニーズに応えるべく、以前ならば広くボランティアを募っていた大規模災害時にも、募集範囲を限定したり、事前登録を求めた影響で、ボランティアの確保自体も難しくなっています。

このようにコロナ禍で防災活動や災害ボランティア活動は影響を受けていますが、令和元年の台風第19号（東日本台風）や令和2年7月豪雨のように、極端な気象現象による災害は頻発し、南海トラフ地震の発生も懸念されています。

いつ、どこで大きな災害が起きてもおかしくありません。そのため、新型コロナウイルスとの共存の視点を持ちつつ、地域防災力の向上、災害ボランティア受け入れの門戸を広げ、全国からボランティアを募ることができ体制づくりを準備しておく必要があります。以下、取り組み事例について紹介します。

地域防災・社協の取り組み

事例1 あしやNPOセンター（芦屋市）

中間支援組織として平成19年から阪神地域を中心に活動しているあしやNPOセンター（以下、「センター」）は、大規模災害時に「公助」による対応に限界があることから、自分の命は自分で守る「自助」と、地域での支え合いを広げる「共助」といった平時の備えを大切にして活動しています。

コロナ禍以前は、地域の防災力を高めるため、住民対象の防災セミナーを年に5回程度開催していましたが、新型コロナウイルスの影響で対面の開催ができなくなりました。

コロナ禍でも活動を停滞させないようにと考えたセンターでは、まずは身近にある防災設備を知ってもらうこと、そして地域住民に避難所の開設・運営に積極的に関わってもらうことをねらいに、避難施設の解錠方法や防災倉庫にある機器や設備を紹介する動画制作を行いました。

芦屋市では、阪神・淡路大震災を機に、指定避難所の学校・公園など42か所に防災倉庫が設けられ、資機材、水、食料などが備蓄されています。また、避難所となる小中学校の玄関付近にある防災ボックスは、地震時に自動で解錠され、近隣住民が自ら教室や体育館を開けて避難所として使用できる仕組みになっています。

動画制作は、市、市教育委員会、市内の高校生や地元ボランティア団体などが企画から編集まで協働で取り組み、市内を拠点に活動する防災士にも協力を得て撮影された動画には、倉庫内の投光器や発電機、炊き出し用調

理器具などの使い方を紹介する場面があります。動画のワンシーンには、出演する高校生からの「使い方に慣れておく必要がありますね」との問いに、防災士が「そうですね。そのためにも多くの方に地域の防災訓練に参加して欲しいです」と応える場面もあり、訓練も含めた地域活動の重要性が強調されています。

映像は10分程度に編集され、インターネットの動画サイトで公開されていますが、市も周知に協力したことで閲覧数も伸びています。動画を見た市民からも「普段意識していなかった防災倉庫や設備を知ることができ、とても良かった」との声も聞かれる好評な取り組みになっています。撮影場所の調整を担った教育委員会は、「市内の小中学校にも動画が伝わるように働きかけ、防災教育に一層力を入れたい」と、今後の動画の活用を見据えています。



小学校の防災倉庫の前での撮影。さまざまな関係者が協力し合って動画が作られました。

センターは、外国籍の住民の増加などを背景にした住民の入れ替わり、建物の建替えなどによる街並みの移り変わりなど、近年の地域の変化を感じています。その変化を踏まえながら大規模災害に備える必要があることから、定期的・継続的に時代に合った防災活動が欠かせないと考えています。その具体的な対応として、多文化共生の視点から、外国の人にも日頃の備えや災害時の対応を理解してもらえらるよう、英語版の動画を撮影中です。

事例2 武雄市社協・災害ボランティアセンター（佐賀県）

センター（佐賀県）

令和3年8月14日の大雨で、佐賀県武雄市では広範囲で浸水被害が発生し、床上浸水が1,100戸にも上りました。同市では令和元年にも大雨の被害を受けましたが、今回の被害はさらに深刻でした。

これを受けて武雄市社協は、市や佐賀県社協と協議し、8月17日に災害ボランティアセンター（以下、「災害VC」）を設置。当初は九州全体からのボランティアの受け入れを検討しましたが、新型コロナウイルスの感染拡大（第5波）と、隣接する福岡県での緊急事態宣言の発令を踏まえ、受け入れを県内に限定しました。

ただし、募集を県内に限っても、人流が生じることに変わりはなく、感染予防に最大限の注意を払うことが必要でした。これを踏まえた結果、災害ボランティアの

受け入れに際し、活動希望者全員に、市で備蓄していた新型コロナウイルスの検査キットを使った抗原検査を実施することに決定しました。検査方法としては、PCR検査が広く知られていますが、比較的取り扱い易く、検査結果も短時間で出ることから、災害VCでは抗原検査を採用する判断になりました。【図表1参照】

ここまでは順調に調整を進めましたが、マンパワーの面で課題が生じます。医療従事者以外のスタッフのみで安全に検査を実施するのは困難だったからです。そこで市社協は、理学療法士として長年勤務した経験を持つ豊村貴司（とよむら たかし）市議会議員に助言と仲介を要請。運営スタッフとして県の理学療法士会のバックアップを得ながら、前例がない災害VCにおける抗原検査の導入を急ピッチで進めました。作業工程や人員配置を工夫して「検体採取↓検査↓判定」をシステムチックに実施する

	PCR検査		抗原検査	
		評価		評価
採取方法	鼻咽頭ぬぐい液 か唾液	○	鼻咽頭ぬぐい液	○
検査実施場所	検査機に検体を搬送して検査を実施	×	検査キットで判定可能 (特殊な資格や技量等は不要)	◎
検査の所要時間	数時間	×	早いもので10分程度	◎
精度	精度が高い	◎	PCR検査よりも精度は劣るが信頼性は高い	○
費用	1回 3,000円以上	×	1回 900円~ 1,000円程度	○

【図表1】PCR検査と抗原検査の比較表
(ひょうごボランタリープラザ作成)



災害から1週間で、抗原検査の実施も含めた災害VCの立ち上げを実現
(写真提供：武雄市社協)

体制を構築し、8月21日のボランティアの受け入れ開始から9月末の災害VC閉鎖までに、延べ1,443名のボランティアが被災者支援の活動を展開しました。

結果として抗原検査による陽性者はゼロでしたが、この間の検査の実施は、ボランティアやスタッフが安心して活動できる環境整備に貢献しました。それと同時に、ボランティアを受け入れ、支援を受ける被災者にも安心をもたらし、ボランティアと被災者の円滑なマッチングにつながりました。

ボランティアの募集を県内に限定した影響で、延べ人数比で、ボランティアの人数は令和元年水害の約4分の1でしたが、最終的には全被災者のニーズに対応でき、スムーズに支援活動を終えることができました。

武雄市社協の先駆的な取り組みは、ウィズコロナでの災害VCの運営のヒントとして非常に参考となります。

ひょうごボランティアプラザの災害対応

今年度を振り返ると、7月1日からの大雨により静岡県熱海市では大規模な土砂崩れが発生したほか、8月の大雨では、事例2で紹介した佐賀県を含む九州地方を中心に20県に及ぶ広い範囲が被災。11市区町社協の災害VCなどでボランティアが活動しました。

プラザでは、大雨や台風の被害を受けた各地に調査隊を派遣し、7月には静岡県熱海市で、8月には佐賀県で、コロナ禍における災害ボランティアの状況などについて調査を行いました。

この調査で明らかになったことを生かす方法を模索した結果、武雄市社協の災害VCで

プラザでは、武雄市社協の取り組みを参考に、コロナ禍での災害VCでの抗原検査（事前準備や留意点等）について取りまとめました。



ひょうごボランティアプラザスクリーニング手法

検索

の抗原検査の取り組みを参考に、検査の実施に向けた準備事項や留意点などをまとめた「災害ボランティア受入時の新型コロナウイルス感染有無のスクリーニング手法について」を作成しました。

また12月には、災害救援に取り組む各種団体、NPO、行政、社協などの関係者と共に「大規模災害を想定した災害ボランティア連携訓練」を実施。コロナ禍での大規模災害を想定しながら、要介護状態の高齢者や障害者など要配慮者に対する支援を中心テーマに据え、講義と演習を交えた実践的な訓練を行いました。

コロナ禍での取り組みは柔軟な対応で

今後発生が想定される「南海トラフ地震」など、大規模かつ広範囲な被害を及ぼす災害では、県外からの支援が届かないことも想定されます。実際に昨年度以降、多くの災害VCでは、新型コロナウイルスの影響でボランティアの受け入れを県内や市内など一定の地域に限定する動きが広がりました。

そのような中、紹介した武雄市社協の事例は、感染症の拡大リスクを可能な限り抑えながら、活動する側も、ボランティアを受け入れる被災者も安心できる環境を整え、被災者のニーズに応えた一つのモデルといえます。

また、あしやNPOセンターの事例では、地域住民を対象とした防災セミナーを従来の

対面型から動画配信方式に切り替え、地域の防災力を高める活動を続けた事例です。動画を作る過程で、高校生や教育委員会などの協働も生まれ、今では「多文化共生」という地域の実情を踏まえた活動にも発展させるなど、地域の防災力をアップデートし続けています。

紹介した二つの事例に共通するポイントは、新型コロナウイルス感染拡大を抑える工夫をし、柔軟な手法を取り入れて活動していることです。つまり、以前から大切にしていた目的はそのままに、コロナ禍に対応する手法は柔軟に、というスタンスで実践を進めているとも言えます。

災害は新型コロナウイルスの感染拡大の状況とは無関係にやってきます。30年以内に70〜80%の確率で発生するとされる南海トラフ地震などの大規模災害を想定し、今一度、コロナ禍でも取り組める日常の防災活動を幅広い関係者と模索することが大切です。また、災害VCを立ち上げる緊急時を念頭に、感染症の拡大防止を図る対策を加えるなど、「災害対応マニュアル」を見直すことも求められます。

新しい年を迎えたこの機会に、普段からの地域の防災活動と、大規模災害時にボランティアを広く募りながら安心して活動できる体制づくりを、あらためて検討することが必要ではないでしょうか。



笑顔輝く

“笑顔”と“共生のまちづくり”につながる実践をレポート

共生のまちづくり

協同互助の精神を基に、組合員の暮らしの安定と生活文化の向上を目指す生活協同組合。今号では、「生活協同組合コープこうべ」が取り組む、買い物支援を二つ紹介します。



買い物支援を通して、つながり、助け合う地域づくりへ



「買いもん行こカー」でみんなで買い物へ

中山間地でも都市部でも、近年、日常の買い物は暮らしの課題の一つです。高齢者や障害を持つ方など、買い物に困っている方がいると聞いたコープデイズ神戸北町のスタッフは、平成28年に無料送迎車「買いもん行こカー」の運行を始めました。



外出し、新鮮な商品を手にも。季節を感じてお買い物

これは、コープこうべと組合員との間で事前調整をした上で、週1回、決まった曜日・時間に、店舗から自宅に送迎車を出して買い物を支える仕組みです。今では

28店で運行され、体が不自由な方や運転免許を返納した方など、年間延べ7万人が利用しています。「買いもん行こカー」は、買い物を支えるだけでなく、乗り合わせる人同士が顔なじみになって会話に花を咲かせる「小さなコミュニティ」になっています。

町社協と共に、見守りを兼ねた買い物支援を実現

神河町では、令和2年にコープこうべ主催の「地域ねっとわーく連絡会^{※1}」を町役場で開催。この際、まちづくりに関わる参加者の間で、町全体の生活課題として「買い物」が挙がりました。

同じ頃、町社協が運営する障害者多機能型事業所「ひと花」は、通所する利用者が地域とつながって働ける場を広げようと模索していました。

町社協の働きかけから、コープこうべと「ひと花」で一緒にでき

ることを約1年協議。昨年12月から「週一宅配」という活動を始めました。

この活動は、コープの配送センターから届く食料品・日用品を、「ひと花」の利用者が注文に応じて仕分け、組合員の自宅に配送する取り組みです。配送時は高齢者の見守りが行える上に、1回200円の利用料は「ひと花」利用者の報酬になります。

取り組みを進めた、コープこうべ地域連携推進室・陰平康則統括部長が、「買い物困難者の解消や、障害者への理解と働く場を広げる取り組みは、他の地域でも求められています。今後も社協や障害者事業所と協働を進めたいです」と語るように、活動のさらなる広がりが期待されます。

※1 消費者問題、防犯、福祉などの視点からまちづくりに関する行政や社協も含めた関係者が話し合う場として開催



地域に出て配送する活動は、就労に向けた訓練にもなっています

取材を終えて

100年の歴史を持ちながら、常に新しい活動を生み出すコープこうべ。店舗などを拠点に、さまざまな関係者が強みと役割を補完し合って進める、助け合いの地域づくりに今後も注目したいです。

生活協同組合コープこうべ

所在地 ▶ 神戸市東灘区住吉本町1-3-19

神河町社協 障害者多機能型事業所 ひと花

所在地 ▶ 神崎郡神河町粟賀町630-6

あなたのまちの 社協活動

共生のまちづくりに
向けて、市町社協が
取り組むさまざまな
活動を紹介します。



今回、紹介するのは

丹波市社会福祉協議会

☎0795-82-4631 (代)

丹波市社協

検索



認知症の当事者が笑顔で活躍できる地域へ

令和元年7月、認知症当事者の方々がスタッフとして活躍する『注文をまちがえる喫茶店「だんない」(以下「だんない」)』が、丹波市にオープンしました。

今回は、“だんない”の立ち上げに向けて、丹波市社協が当事者や関係機関と一緒に進めた活動を紹介します。

※だんないは地元の方言で「気にしない、かまわない」の意味

当事者・家族の想いを 実行委員会・地域で共有

だんないは、認知症当事者家族の「認知症の人が主役となって楽しめる場が地域にあれば」という声から生まれました。

家族の声を聞いた市社協は、当事者家族、日頃から連携している住民、地域包括支援センターと共に実行委員会を設立。実行委員会では、「忘れても間違えても、温かく受け入れてほしい」という想いを共有し、個人や企業から賛助・寄付などの協力を得て、地域に根差した喫茶店を始めることになりました。

まず重視したのは、当事者・家族の視点です。そのために、地域包括支援センターが行う個別相談や医療介護連携、地域へのアウトリーチを活かした当事者・家族との信頼関係の構築に努めました。また、地域との協働や息の長い活動にすることも重視し、社協が進める地域の意識づくりやネットワークづくりをベースに、自治会長会・自治協・

民生委員などで構成された「地域支え合い推進会議(協議体)」の協力を得て企業への働きかけを行いました。同時に自治会長会などで認知症サポーター養成講座を開催して認知症を受け入れる風土を醸成するなど、地域、企業、関係機関の協働を基盤に活動できるよう準備を進めました。

試行錯誤を重ね、コロナ禍に負けない 取り組みへ

初の実行委員会から5か月。地元の飲食店を借り、当事者スタッフ・家族との打ち合わせ、まちがえない仕組みづくりなど、本番を想定したシミュレーションを経て、だんないはオープンしました。

新型コロナウイルスの影響で、開催を見合わせた時期もありましたが、テイクアウトを導入して活動を続ける工夫も図りました。コロナ禍でもSNSや口コミもあり、だんないには若者の来店も多く、多世代交流も生まれています。

市社協の生活支援コーディネーターの庄司滉祐さんは、「当事者への理解と支え合う意識と風土の醸成は共生のまちづくりに不可欠。関係機関との協働、地域や協議体を軸に地域団体や企業とのネットワークを広げる“三方よし”、マネジメントを意識しました」と活動を振り返りました。



当事者
スタッフの方も
笑顔で接客

取材を
終えて

当事者の居場所づくりやエンパワメントの大切さに加え、地域・関係者間の話合いによる協働のあり方を改めて考える機会になりました。



“だんない”
インスタグラム



“だんない”
ホームページ

※次回は2月5日にテイクアウト形式で開店します

活動のポイント

誰もが活躍できる
地域づくりは、
当事者の思いと声を紡ぎ、
共に話し合うことから
はじまる。

セルフヘルプグループの リアル

ふたつばクローバーの
花言葉は
「平和・調和・素敵な出会い」。
素敵な出会いが
芽生える場になればと活動
しています



ふたつばクローバー（きょうだい会）

障害のある兄弟姉妹を持つ当事者（きょうだい）が、当事者ならではの思いを分かち合う「きょうだい会」。三木市にきょうだい会「ふたつばクローバー」を立ち上げ、ご自身が「きょうだい」であり、障害を持つ子の親でもある代表の松原育子さんにお話を伺いました。



▲新しくできた福祉施設について情報交換



▲社協主催のボランティアフェスタでも活動を紹介しました

グループの概要

名 称	ふたつばクローバー（きょうだい会）
定例会開催日	奇数月 第4土曜日 17:00～
開催場所	三木市末広1丁目6-46市民活動センター内 ボランティア活動プラザみき TEL：0794-83-0090

Q1. グループを立ち上げたきっかけは

A. 私には3人の子どもがおり、長女は発達障害、長男は自閉症です。また、私の兄も知的障害があり、両親が亡くなった後、兄が一人で生活できるよう私が障害者手帳の申請などを行いました。すると、当時まだ幼稚園生だった次男が、「僕も大きくなったら、お兄ちゃんのお世話をしないといけないの？」と不安げに尋ねてきたのです。私は、「あなたの人生だから、お兄ちゃんのために生きていく必要はないよ」と伝えました。

その後、次男と神戸のきょうだい会に参加した際、学校で境遇を打ち明けられないことや、親しい友人を作りづらいという同年代の子たちの悩みに彼は強い共感を覚えたそうです。今は高校生になった次男のためにも、地元で語り合える場をつくれたらと、令和元年に「ふたつばクローバー」を立ち上げました。

Q2. 現在どのような活動に力を入れていますか

A. 2ヶ月に1回開く定例会です。参加者が悩みや本音を打ち明け共感し合うことで、普段は張り詰めている心も体も安らげる「頑張らなくていい場所」になるよう心掛けています。抱えている問題が解決しなくても、仲間に話を聞いてもらうだけで気持ちがすっきりし、先輩家族から経験に基づいた「生きた情報」を教えてもらうこともできます。

きょうだい同士がつながれる場はまだ少ないのが実情です。ある参加者から「親の立場で話し合う家族会はたくさんあっても、『きょうだい』の立場で話せる場がなかったのでもありがたい」と言ってもらえたのはうれしかったです。

Q3. 社会に望むことやグループの目標は何ですか

A. ふたつばクローバーを立ち上げた頃、既に社会人になってきょうだいの立場から少し遠ざかっている人たちから、「中学生の頃にこんな会があれば行ったのに」という声を聞きました。悩みやすい思春期の真っ只中にいる子どもたちにこそ、私たちが扉を開けて待っているというメッセージを届けたいです。

今はまだ少人数での開催ですが、将来への漠然とした不安を抱える人々が出会い、一人じゃないと思える場所を目指して、定例会をゆるく長く続けることが大切だと思っています。



「共生のまちづくり」に向けた
取り組みを共に進めよう

「県社協2025年計画」に掲げた共生のまちづくりの実現に向けたイベントとして、県社協は11月29日、神戸市産業振興センターで「共生のまちづくり」推進フォーラムを開催しました。

まず記念講演では、俳優としての活躍はもちろん、長年のボランティア活動と、障害や生きづらさを抱える人たちの創作・表現活動をサポートする一般社団法人Get in touchの代表として知られる、東ちづるさんに「誰も排除しない『まぜこぜの社会』を目指して」のテーマで講演いただきました。

東さんは、骨髄バンクのボランティア活動や、Get in touchの設立につながった東日本震災の避難所で見えてきたマイノリティの人たちの生きづらさを紹介。「浅く広くゆるくつながる」をキーワードに、マイノリティとされる人やさまざまな障害、生き



「まぜこぜの社会」を目指して、「浅く、広く、ゆるくつながろう」と話す東さん

づらさを抱える人たちが共に生きられる社会を「まぜこぜの社会」とし、一人一人が自由でありながら助け合える社会の姿と、その実現に向けて取り組む、音楽、映像、アートなどの表現活動についてお話を頂きました。

豊富なボランティア経験と、活気あふれる映像を交えた講演は参加者を引き付け、エンターテインメントを通じて「まぜこぜ」の居心地の良さを発信し続ける東さんの活動から、参加者が多くの気づきを得ながら記念講演は終了しました。

フォーラム後半のパネルディスカッションでは、猪名寺自治会会長・内田大造さん（尼崎市）、社会福祉法人ゆたか会理事長・蓬萊和裕さん（加西市）、養父市社会福祉協議会地域福祉課長・小畑美鈴さんに登壇いただき、実践報告をいただきました。

内田さんからは、最寄りの駅にエレベーターを設置する運動をきっかけに自治会が活性化した経緯、高齢者の生活支援ボランティア「支え合いの会」の設立などについて報告され、蓬萊さんからは、法人の理事長の立場から地域に根差した施設運営や農福連携の実践、市内の社会福祉法人が連携した地域活動について紹介いただきました。

また、小畑さんからは、社協が長年取り組んできた「福祉委員」「福祉連絡会」に代表される、暮らしの身近なエリアでの話し合いの場の設置と、住民発で生まれた支え合い活動などを紹介いただきました。

3名からの報告を受け、武庫川女子大学・松端克文教授に進行いただいたディスカッションでは、地域への「愛着や誇り」という何物にも代えがたい財産を共有する

こと。そして、課題やニーズに向き合い、話し合いや活動のプロセスを共に楽しむことで取り組みの輪を広げられるという視点を共有し合あって、フォーラムを閉会しました。



登壇者からは、地域への愛着に根差した支え合いの取り組みが発表されました

記念講演でお話いただいた、東ちづるさんが代表をつとめる、一般社団法人Get in touchの活動については、ぜひこちらをご覧ください！



YouTubeチャンネル



公式サイト

社会福祉の充実・発展に
貢献した方の功績をたたえて

11月12日、南あわじ市文化体育館にて、県、県社協、南あわじ市、南あわじ市社協の共催で第69回兵庫県社会福祉大会が開催され約500名が参加しました。

社会福祉大会は、社会福祉の充実や発展に功績のあった方々に県知事及び県社協会長が表彰を行い、かつ、記念講演などを交え、時々社会福祉を巡る情勢や地域でのつながりや支え合いについて考える場として昭和26年から続いてきました。昨年度はコロナ禍で中止(表彰式のみ実施)となりましたが、今回は2年ぶりの開催が実現。被表彰者を中心に集った関係者が互いをたたえ、気持ちを新たにする場ともなりました。

大会の第1部である表彰式典では、880の個人・団体が表彰され、県知事、県社協会長より代表者に表彰状が贈呈されました。

第2部では、看護師として活躍するかたわら、北京・ロンドンパラリンピックに競泳日本代表として出場し、義手バイオリニストとしても知られる伊藤真波さんを招

き、「あきらめない心」と題した記念講演が行われました。

多くの葛藤を乗り越えて挑戦を続けてきた経験談に多くの参加者が引き込まれた後、伊藤さんはバイオリンの演奏を披露。美しい音色の余韻に包まれて大会は閉幕しました。



齋藤知事より長年の功績をたたえて



講演の最後、バイオリンの演奏を披露する伊藤さん

寄付・寄贈のお礼

今号では、昨年の11月以降に温かな善意をお寄せいただいた企業・団体をまとめて紹介します。

- 一般財団法人近畿陸運協会様並びに株式会社キリック様より、県社協へ寄付
- 一般社団法人生命保険協会兵庫県協会様より、県内市町社協に福祉巡回車と車いすの寄贈
- 関西遊技機商業協同組合様より、県内市町社協に車いすの寄贈
- 一般社団法人兵庫県宅地建物取引業協会様より、県社協へ寄付

温かな善意に対し、ここに感謝申し上げます。

お知らせ

公益財団法人木口財団では、2月1日から障害者等を支援するボランティア活動を支える「地域福祉振興助成」の公募を始めます。

詳細は、木口財団のホームページをご覧ください

<https://kiguchi.or.jp/>

自然災害で被災した住まいの再建に備えて
兵庫県住宅再建共済制度
【フェニックス共済】

<p>住宅再建共済</p> <p>年額5,000円で再建、補修時等に 最大600万円給付</p> <p>半壊以上(損害割合20%以上)</p>	<p>準半壊特約</p> <p>年額500円で補修時等に 最大25万円給付</p> <p>損害割合10%以上20%未満</p>	<p>家財再建共済</p> <p>単独加入 年額1,500円 住宅とセット加入の場合 年額1,000円</p> <p>購入・補修時に 最大50万円給付</p> <p>床上浸水又は半壊以上</p>
---	---	---

公益財団法人 兵庫県住宅再建共済基金
フェニックス共済 検索

コールセンター (平日9:00~17:00)
078-362-9400 Fax 078-362-4082

兵庫県社協 出版図書のご案内
これ一冊で、経営計画の策定手法が分かる!

社会福祉法人経営計画 策定ワークブック

> 詳細は兵庫県社協ホームページへ
<https://www.hyogo-wel.or.jp/about/books.php>

【申し込み・問い合わせ先】兵庫県社協 企画部 TEL078-242-4633